



水野理事長退任挨拶
 河野理事長就任挨拶
 清水副理事長退任挨拶
 随想

What's New
 ニュース&レポート
 わが社の研修協力記
 講師の研修への熱意
 KITA研修コースの紹介
 KITAの国際親善交流
 トピックス

退任挨拶



(財)北九州国際技術協力協会
理事長 水野 勲
(平成16年12月31日付退任)

昨年末をもちましてKITAの理事長を退任致しました。

長き道のりであったのか、一瞬の瞬きであったのか、今振り返ると只々感謝の思いのみがこみ上げてまいります。二十五年にわたっての皆様からの御厚誼に衷心より厚く御礼申し上げます。

まさに浮生碌々ではございませんが、不思議な縁が縁をよび、また絡み合って国際技術協力に携わるKITAの理事長として様々な方々との邂逅を楽しんで参りました。KITAが現在までに受け入れた技術研修員は百十四カ国、三七〇〇名を越えております。各研修コースとも先ず開講式にはじまって研修員の各国工業お国事情発表...研修成果発表会等があり、私はそれらに出席、参加しては研修員と楽しく語らう機会がコース毎に何度かありました。前途洋々とした本当にたくさんの若者に出会ってはKITAの使命を再確認し、また、誇らしくも感じ、彼らの帰国後の活躍を思っては心強さを感じたものでございます。そしてまた、KITAの技術協力推進の陰にどんなに多くの産・官・学・一般市民の惜しむことのない、また変わることはないご支援があったことでしょうか。そこにはいつもKITAへの

温かいまなざしと激励と期待がありました。

北九州のNGOとして昭和五十五年(1980) JICA研修に始まったKITAの組織陣容は現在に至って70名を越え、その活動は海外に専門家を派遣して各国で様々な技術プログラムを展開するまでに成長発展致しました。創立以来、「持続可能な産業発展」を追及し、世界の国々と共に資源の限られたこの地球上で真に豊かに暮らすことを目指して各技術協力事業に心血を注いでまいりました。

本年KITAは新理事長のもとに創立二十五周年を迎えようとしております。これからもKITAはその創立の精神にたがわず、まさに全世界に技術協力の面から奉仕する喜びを感じつつ、工業発展と環境保全の両翼を大きく張り広げて飛び続けることだと強く確信しております。今後とも皆様からの引き続いてのご指導とご鞭撻をKITAへ賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

KITAとお世話になりました皆様方への愛惜の情は深いものがございますが、天の時ここに至り本紙面をもちまして退任のご挨拶申し述べさせていただきます。

就任挨拶



(財)北九州国際技術協力協会
理事長 河野 拓夫
(平成17年1月1日付就任)

このたび、水野前理事長のあとを受けて
KITA 理事長に就任いたしました。

今日までの KITA 四半世紀の歴史は、各界の
多くの方々の惜しみない善意と献身で築き上げ
られたものであると同時にリーダーである水野
先輩の人間性の発露でもあったと感じております。

このような偉大な指導者の後を継ぐなどとい
う大それたことは私にはとても出来ないと思っ
ておりましたが、これも私に与えられた天命と
受け止め、渾身の力を振り絞ってことに当たり
たいと決意いたしております。

これからの KITA の使命は、創立の精神を忘
れず、人類社会の平和と限りある地球での共生

を目指し、私たちの持てる力を生かすことであ
ると考えています。それは言い換えれば、前理
事長の退任挨拶文の中にありますように「工業
発展と環境保全の両翼を大きく張り広げて飛び
続けることである」と信じます。時代は常に流
動変化していますが、その中で KITA スピリット
を具体的にどのように生かし続けるのか、真剣
に考えなければならない課題であると自覚して
おります。

今後とも皆様から更なるご指導とご鞭撻を賜
りますようお願いしつつ就任のご挨拶とさせて
いただきます。

KITA 新理事長河野拓夫略歴

昭和6年生まれ

昭和29年3月 東大工学部冶金科卒

昭和29年4月 八幡製鉄(株)入社

昭和60年6月 新日本製鉄(株)取締役就任

平成2年6月 黒崎窯業(株)社長就任

平成8年6月 黒崎窯業(株)取締役相談役就任

平成8年6月 (財)北九州国際技術協力協会副理事長就任

現(就任順)

内外ニュース北九州懇談会会長

(社)西日本工業倶楽部理事長

(社)若松ゴルフ倶楽部理事長

北九州交響楽団理事

九州ゴルフ連盟常務理事

北九州市立美術館協議会会長

退任挨拶



(財)北九州国際技術協力協会
副理事長 清水 泰
(平成16年10月31日付退任)

振り返りますと、1982年にコースリーダーとしてKITAの活動に加わりましたが、当時はODA予算(政府開発援助)の急増期で研修コースの受託に努力することなくコースは増加し、この地域にJICA九州センターを開設することも決まりましたので研修部長を任命されて多忙な毎日を送りました。

途上国が無駄の多い工業化を進めていることが、地球環境問題・資源枯渇問題を引き起こす大きい要因になっているとの認識が、技術協力を通じて次第に分かりました。

北九州が戦後に達成した持続可能な工業発展の経験は、途上国にとって貴重なものですのでKITAの協力にはこの経験の移転を主に取り上げました。

わが国の過去を振り返ると、1948年に当時のアメリカの占領軍から日本企業は「管理」が悪いと指摘され、管理の基本を指導されました。日本人は長い教育の歴史から個人の資質が他の国に比がないくらい高いので、企業が管理制度を作れば、「全員参加の管理」ができて、ひどい環境汚染を克服して、持続可能な発展を遂げることが出来ました。

工業の持続可能な発展に、全員参加の生産管理であるクリーナープロダクション(以下CP)を行うことが不可欠ですが、日本企業では全員参加の管理が当然であるので、企業ではCPを行っているという意識は全くありません。

途上国へのCP協力には、企業の現状だけを伝える

ことは無意味で、途上国との人材能力格差を認識し、しかも日本の戦争直後の無管理の時代を思い起こし、戦後何をして企業がよくなったかを思い起こして、これを基本に途上国と目線を合わせた協力をする必要があります。

KITAは産・官・学の協力を得て、JICAコースでCPに関する研修を進めて成果を挙げえたために、日韓産業協力財団からも韓国中小企業の研修を受託し、また、多くのCPプロジェクトをJICAはじめ、多くの団体から受託しています。

研修でCPを途上国の研修員に理解してもらうには、講義で概念を伝えるだけでは無理で、むしろ目で見える企業研修にも重点を置くべきで、九州各地をはじめ広く国内の企業の協力が得られることは極めて有難いことです。

また、KITAとしては、高齢都市・北九州での国際協力を通じて、企業等のOBの方々の生きがいの場を作り、増やしていくことも重要な責任と思います。

発展途上国がCPを達成することで、地球環境問題、資源枯渇問題、貧困問題の解決が大いに進みます。

途上国の現状を考えますと、持続可能な工業発展には「日暮れて道遠し」の感を強くしますが、私たち日本人が途上国でCPを行えるように協力することで、地球規模の問題を解決することに繋がる、即ち地球の未来を守るために協力していることがようやくわかってきました。

随想 ZUISO •ずいそう•



(財)北九州国際技術協力協会
コースリーダー
黒澤 準一

■テロに思う

2001年9月11日のニューヨークのビルへのテロ攻撃に端を発したイラク戦争は、米国の石油利権に絡んだ戦いとの見方もありますが、イスラム過激派のテロに対する断固たる挑戦です。

テロ行為は絶対に許さぬという決意を世界に示す戦いですが、対戦相手だったサダム・フセインの逮捕、イラクの首都バグダッドの陥落以降のイラク側の対応は、反米行動の1語につきます。

米国の60年代のベトナムへの侵攻とはこのところ一寸事態が異なっているようで、繰り返されるテロ攻撃に今後どう対応するか、大統領選挙を終え今後の展開が懸念されます。

戦争というものとは2国間のまたはそれに関係した複数国間の争いですが、21世紀に入ってからは、テロ攻撃が世界各地で頻繁に発生しています。過去の歴史においてもテロはかなり見られていたものの、今世紀ほど多発で組織的ではないようです。

今世紀に入って戦争というものの形態が変わってしまったのでしょうか？

戦争の原因となるものは多々ありますが、こと宗教的な信仰に基づく主義思想の対立、民族・人種の違いからくる戦いなどは、その解決策というものには永久にありえません。

また、他国からの支配を脱するための独立の戦いは、独立国家を樹立したあと余程しっかりした政権が確立されなければ、かえって国民の苦しみは増すばかりとなります。

戦争のために犠牲となり命を失う者、居住地が戦場となったために土地・住居を失い他の地域に逃れる避難民、戦い

の巻き添えを食って難民となった者は哀れです。

この世に生を受けた人間として、平和に安穩に暮らせることほど良いことはありません。それが不幸にも、己の意思に反して難民となり、その日の糧にも支障を来たすことは、世の古今東西の長い歴史において再々です。

1日1日を安穩に暮らせることを望む平凡な人間としてみれば、どのような政権であっても、安定したものであれば構わないというのが本音ではないでしょうか。

独立国または独立した民族でも紛争の繰り返しであるよりは、大国に支配されていた時代のほうが一般民衆にとってはむしろ安寧であったと言えることは歴史が示すところです。

わが国が、明治の世になって遥かに進んだ西欧文明を容易に受け入れて咀嚼し、世界の列強に肩を並べることが出来たのも、江戸260年の治安と制度の行き届いた時代に培われた教育にあります。

昭和20年8月15日、日本の敗戦によって、当時外地にあったわが家族は全財産リュックサック1つで父母の故郷に引き揚げてきました。我々を暖かく迎え入れてくれた故国日本の人々、中国の詩人杜甫の「国破れて山河あり」の句を、この時ほどしみじみとかみしめ、受け入れてくれる国があるのを有り難く感じたことはありません。

日本人として生を受けたことをつくづく有り難く思うのであります。

戦禍に曝され難民となった人々が、1日も早く平和で安穩な生活を取り戻すことが出来る日の来ることを望むこと切なるものがあります。

KITAの臨時理事会12月24日に開催



臨時理事会(12月24日(金))

昨年末、12月24日にKITAの臨時理事会が開催されました。

昨秋、水野理事長から平成16年12月31日をもつ

て理事長職を退任する旨の意向が表明され、これに伴い後任の理事長を選任することが臨時理事会の主要な審議事項でした。

審議の結果、河野拓夫副理事長が満場一致で後任理事長に選任され、本年1月1日付で理事長に就任することが決まりました。河野新理事長から就任承諾と将来に向けての強い決意表明があり理事会を終了しました。

理事会終了後、KITA二十余年の歩みを振り返るビデオが上映され、出席者一同あらためて水野前理事長の存在の大きさを強く印象付けられました。KITAの初代理事長として設立以来その草創期から今日の基盤を築くに至るまで24年にわたり心血を注がれ、ひとことでは言い尽くせない多大な功績を残された水野前理事長に対し、多くの出席者から敬意と感謝の言葉が寄せられました。

JICA調査に参加『エジプト生産性向上』

エジプトでは、2010年のEU自由貿易圏形成を目指し『産業近代化プログラム』を推進しています。産業界の生産性向上に対する高いニーズに対し、今後の研修、支援のあり方を見直すため、直接現地に出向き『生産性向上に関する実情調査』を行い、研修に対する要望、ニーズの把握、産業界の抱えている課題の調査を行いました。

特に、今回は、帰国研修員6名に出席いただき、アクションプランのフォローや意見聴取を行いました。また、カイロとアレキサンドリアで、経営者を中心に品質管理セミナーを行い、討論を通じ生産性向上に対する熱意と期待を強く感じました。

さらに、官営工場2社、民営工場1社の工場視察を行い、工場長から現場第一線までの働きぶりや考え方がよくわかりました。

今回の調査では、初対面にもかかわらず胸襟を開いた本音の意見交換ができ、今後の研修支援への貴重な情報が得られました。

帰国研修員の意見としては、JICA、KITAの研修に関する評価は高いのですが、アクションプランを含め研修成果の生産現場への実践展開が今一つでした。

経営者からは実践的な改善指導の強い要請があり、現場には改善すべきテーマが山積しており、今後、政府、

経営者、コンサルタント、JICAが一体となった改善活動の推進が楽しみです。

(横山 清記)

月 日 平成16年9月24日(金)～10月2日(土)
調査団 エジプト国生産性向上研修運営指導調査団
調査員 JICA九州業務第二チーム長 佐佐木健雄氏
JICA九州業務第二チーム職員 岩崎真紀子氏
[財]日本科学技術連盟 囑託 横山 清



エジプト工業貿易省生産性職業訓練局研修責任者訪問
(平成16年9月)

JICA調査に参加 『ガーナ地方産業活性化のための人材育成』



ガーナ・中小企業庁との協議（平成16年11月8日）

今回調査の目的は、ガーナ政府からの協力要請のあった開発調査「地方産業活性化計画 Rural Enterprises Development Programme REDP」の妥当性と具体的協力内容の策定であります。合わせて、そのREDPを運営する人材の育成ニーズを調査することです。

現地での調査は、首都のアクラ市内では、REDPを企画する貿易産業省、中小企業庁、民間セクター開発省、財務経済企画省、UNIDO、ガーナ規格標準局などの中央行政関連で行いました。地方では、REDPの推進役である地方郡政府、そしてREDPを実行する村落企業組合COVEの調査を、ガーナ第2の都市クマシヤケーブコーストで行ないました。

今回の訪問を通じて下記3点の能力不足を感じました。日本国内研修では、それらの能力開発を含めたカリキュラムの作成を考慮したいと思います。

- 1) 国として産業振興普及施策の1次産業から1.5次産業化への動機付け能力
- 2) ガーナとしてのコア・コンピタンスの発掘と産業育成ビジョン立案に必要な能力
- 3) 経営管理能力（総合的品質管理、原価管理、品質規格、管理会計、マーケティングなど）

（三木義男記）

月 日 平成16年11月6日（土）～11月14日（日）

調査国 ガーナ

調査員 団長 JICA国際協力総合研究所
国際協力専門員 花井正明氏
JICA経済開発部
第一グループ中小企業チーム 池上宇啓氏
JICA経済開発部
第一グループ中小企業チーム 林田隆之氏
JICA九州国際センター
業務第一チーム兼第二チーム 坂部英孝氏
（財）北九州国際技術協力協会
コースリーダー 三木義男

「西日本プラントエンジニアリングシンポジウム 2004」開催220名参加

標記シンポジウムが昨年10月5日から7日までの3日間、北九州国際会議場（北九州市小倉北区）を中心にKITA主催で開催し、盛会裡に終了することができました。

このシンポジウムは、地場企業の活力強化と人材育成の増進を目的に、北九州市を初め地域関係諸団体の支援を得て、1992（平成4）年から隔年実施し、今回は7回目となります。

今回は経済産業省及び北九州市からの援助を頂くとともに後援諸団体のご支援により開催したものです。

初日は企業体質強化と産学連携の推進、2日目は地場企業の海外事業進出をテーマに、大学教授及び企業の技術者による講演とパネルディスカッションが行われ、参加者からの質疑応答を含め熱心な討議が行われました。

3日目は前2日間の講演テーマに関連した施設の見学を実施し、午前には北九州市エコタウンの概況説明と地域見学の後、廃木材・廃プラスチック再生を行っている㈱エコウッドの工場及び㈱エヌエスウインドパワーひび

き社の風力発電施設を見学し、午後は若松区の学術研究都市の産学連携施設を見学しました。産学連携フェアが同時に開催されており、大学と企業の研究成果の展示実演を見ることができました。この後、㈱三井ハイテックの金型事業所（八幡西区）の精密加工技術を見学し、無事終了しました。

3日間の参加者は延べ223名にのぼり、北九州市内及び県内はもとより九州各地のほか、関西方面からも参加いただき、今回のテーマに対する関心の高さがうかがわれました。

関係の皆様のご協力ご支援に厚くお礼申し上げます。



講演する政策研究大学院大学教授橋本久義氏

最近3カ月間(平成16年10～12月)にKITAで研修修了した11コース92名

(平成17年1月)

	コース名	受託先機関	コースリーダー (サブコースリーダー)	KITA研修期間(月/日)	研修人数
クリーナー プロダクション (CP)	自動制御(基礎)	JICA	田嶋 澄夫	7/20～11/16	8
	金属加工技術の品質保証	日韓財団・韓日財団	香山 研一 (三浦 正克)	8/31～10/22	11
	高付加価値生産性向上	日韓財団・韓日財団	春田 益男 (三浦 正克)	8/31～10/22	12
	中小企業管理者のための生産性向上	日韓財団・韓日財団	石井 武明 (三浦 正克)	8/31～10/22	11
	設備診断技術と改善方案	日韓財団・韓日財団	北田 弘 (三浦 正克)	8/31～10/22	6
	大連市CP導入に対する人材育成(第3回)	JICA	吉永 博一	9/28～10/28	2
環境管理	産業医学	JICA	高橋 謙	8/16～11/30	11
	産業廃水処理技術	JICA	荒川 敏一 (真鍋 多見夫)	7/26～11/12	9
	生活排水対策	JICA	小川 勝 (山口 勝)	8/30～11/26	8
	大気汚染源モニタリング管理	JICA	紅 露 良次	8/30～11/29	7
	ネパール・廃棄物処理	JICA	黒澤 準一	12/1～12/24	7

計92名

韓国中小企業技術者専門研修フォローアップセミナー実施結果

昨年10月22日に研修を終了した韓国中小企業研修生が作成したアクションプランの実施状況について、コースリーダーと討議するセミナーを韓国中小企業振興公団からの要請で実施しました。同時に日韓両国政府の意向による、来年度の事業計画の見直しについて、主催機関の両国産業技術協力財団とKITA、韓国公団の実施機関とで打ち合わせを行いました。(韓国南部に今秋完成した鎮海研修院で11月24日～26日)

昨年研修参加者の半分の20名が参加し、KITA石井コースリーダーからの講義後のコース別のセミナーでは、終了後1ヵ月では未だアクションプランを実施していない企業が多く、具体的な解決策の討議よりは問題点の整理が主となり、上司の理解を得られぬことが障害となることが報告されました。

明年度事業計画については、各コースの内容を核心分野に絞って、期間を約8週間から6週間に短縮し、コース定員を10～8名に減じて効率を上げ、最大の問題

である日本語能力を重視した選考をすることが決まりました。また、グループディスカッションを取り入れ、研修成果の普遍化を狙うと共にフォローアップ事業を行い、上司の研修への参加も計画しました。

(技術協力部 吉永博一記)

[韓国中小企業振興公団から受託]



韓国・鎮海研修院にて(平成16年11月)

インドネシア国スラバヤ市における分別収集・堆肥化による 廃棄物減量化・リサイクル促進事業

スラバヤ市における一般ごみ減量化に向け、家庭用生ごみの分別とその堆肥化に取り組んでいます。堆肥化の専門家である株式会社ジェイペックの高倉弘二氏と現地を訪問して、その気候や風土に合った最適な方法を実験により求め、得られたいくつかの方式の普及を目指して現地のNGOであるPUSDAKOTA、スラバヤ市と協力して事業を展開しています。

現在、生ごみは各家庭の軒先で、ビニール袋に入れられたまま2～3日毎の収集まで保管されているところが多く、一年を通じて高い気温であるため、その保管時の衛生状態は悪く、悪臭とともに害虫の発生源となっています。また収集時の生ごみの大半が腐敗した状態となっています。したがって、各家庭で生ごみが発生した時点で堆肥化が開始できる方式や、集められた腐敗した生ごみも最適な方法で堆肥に変えることのできる方式など、現地で安価で容易に入手できる部材を利用して取り組んできました。

同時に、これまでにスラバヤ市などが取り組みながら、悪臭などの問題により休止中であった装置の改良を行い、その有効活用方法について現地に技術移転しました。

今後は、それら取り組みを拡大していく予定です。

(KITA 環境協力センター 石田哲也記)

[独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金から受託]



各種堆肥化の方式

JICA 草の根技術協力

「大連市のクリーナープロダクション（CP）導入に対する 人材育成」コース（第3回）実施



JICA・草の根協力事業として大連市環境局職員を対象とした研修中の大連市環境保護局職員（向かって中央2名）受入研修が関係機関、企業のご協力を得て終了しました（9月28日～10月28日）。今回で修了した研修結果の特記事項を記します（3年×2名/回）。

大連は中国の中ではCPの推進が進んだ地域ですが、研修員はCPを狭義の環境保全対策と考えており、研修での体験を通して、CPが企業の生産方式の改善活動で、特に企業経営者が全社の改善活動として取り組むこと

が必須要件であることを認識しました。

日本企業の実態を見聞して、CP活動では従業員の問題発見能力の涵養が大切で、このために管理者、監督者の能力を高めることが必要であることを印象付けられ、この効率化活動が企業の利益を生み、CPの推進力となることを知りました。

北九州における循環型社会の構築に向けた官民の組織的な活動に、大きな驚きを持ち、行政のきめ細かな規制、企業の環境報告書に示された改善活動に深い感銘を受けました。研修員は帰国後、CP推進のための企業の自主性を高める啓蒙活動、人員育成、モデル企業によるCP推進への助成等の計画を持って帰国しており彼らの着実な活動の成果を期待しています。

(技術協力部 吉永博一記)

[JICA から受託]

第4回日独PIUS会議でKITAの取組を発表

PIUSとは「製品・生産プロセスに統合された環境保

全」という意味で、我が国ではCleaner Production（CP）

とほぼ同じ概念です。当会議は、このPIUSをテーマに、日本とドイツの専門家が一堂に会して、講演及びディスカッションを1年おきに両国で交互に開催しています。今回、KITAと日本クリーナープロダクション研究会、NRW州効率化エージェンシー（EFA）とECOSジャパンコンサルタントが主催し、10月26日北九州市のFAZ展示場8階で開催しました。当日は100名を超える参加者がありました。会議は、末吉北九州市長等から歓迎の挨拶で始まり、（財）地球環境産業技術研究機構（RITE）の茅陽一副理事長や、ドイツ側からファクター10研究所フリードリッヒ・シュミット・ブレイク所長の基調講演がありました。その後、（株）BASF中国や（株）新日本製鐵八幡製鐵所等から興味深い報告があり、最後に「ク

リーナープロダクションを中心としたKITAの取組」と言う題目で、KITAがこれまで実施してきた中国や東南アジアでのCP事例や国際研修での取組を発表しました。

（KITA環境協力センター 内藤英夫記）



KITAの事業説明をする内藤次長

中国・重慶市技術指導者派遣事業(ソフト産業について)



重慶市信息产业局でのセミナー風景

日本からソフト制作をアウトソーシングする場合のメリット、問題点の調査です。

出張にはKITAから1名と武漢でアウトソーシング事業を展開している安川情報システムから3名が行きました。

最初にソフト開発に関するセミナーを開催しました。

昨年10月11日から16日まで重慶市にIT技術の指導・調査のため出張しました。出張の目的は日

本からソフト制作をアウトソーシングする場合のメリット、問題点の調査です。出張にはKITAから1名と武漢でアウトソーシング事業を展開している安川情報システムから3名が行きました。最初にソフト開発に関するセミナーを開催しました。

参加者は企業関係者など約30名で、とくにアウトソーシングで発生しやすい問題点と克服について、武漢での実績をもとにした講演は好評でした。

ソフトウェア企業は4社を調査しました。各社とも日本とのビジネスの拡大に期待を寄せています。日本から見た場合、大連、上海、深圳などの沿岸部に比べて人件費、事務所費用などが相当に安いこと、またソフト制作の基本的な技術についても一定レベルを保有していることを確認しました。ただ日本語を理解し、プロジェクトを推進できる中核になる人材となると非常に層が薄く、事業を展開していくにはこの中核となるプロジェクトリーダーの育成が日中双方に求められると思います。

大学は2校を視察しましたが、2校とも日本との交流拡大を切望しています。

（KITA技術協力部 厚見 直記）

[北九州市から受託]

環境国際協力セミナー『My future ~ 国際協力で活躍しよう!』の開催

昨年11月28日（日）国際村交流センター国際会議室にて、KITA、北九州市、北九州グリーンユース（学生環境NGO）の主催で、『My future ~ 国際協力で活躍しよう!』を開催しました。丸1日のセミナーにもかかわらず80名もの参加があり、このうち9割は学生で県外からの参加もありました。

「これから国際協力に関わる若者たちへ」と題し、当センター所長の廣野良吉先生が基調講演をされ、パネルディスカッションと座談会の講師としては、国連ボラ

ンティア計画、世界銀行、JICAのほか、学生環境NGOとして活発に活動し



パネルディスカッション(左端:コーディネーター廣野先生)

ている大学生2名もお招きしました。

午後からは事前に希望をきいて5つに分かれた「The座談会」を2時間行い、その後全体で各座談会の報告会を行いました。講師の年代も近いせいか参加者の質問が活発に飛び交い、ワークショップでは互いの意見を1つにまとめるのに奮闘していました。参加者からは「心

に焼きつく言葉がいくつもあった」「自分の気持ちに拍車がかかった」などの感想が寄せられ、近い将来国際協力で活躍する若者にとってこの日が1つの光る瞬間だったと言われる日が来ればいいなと期待しています。

(KITA環境協力センター 柴 郁代記)
[北九州市から受託]

地球市民大学校「環境NGOと市民の集い」



パネルディスカッション(左端:坂本先生)

で環境保全活動を行うNGOの支援を目的に、「地球市民大学校 環境NGOと市民の集い」を福岡市で開催しました。当日は、NGO、市民、高校生等130人の参加者があり、初めに地球環境基金の助成を受けた団体を含め11団体(福岡県5団体、長崎県1団体、熊本県2団体、宮崎県1団体、鹿児島県2団体)が今年度の活動状況を発

(独立行政法人)環境再生保全機構から委託を受けて、昨年12月4日(土)、九州地域

表した後、各団体ごとにテーブルに分かれて参加者との意見交換会を行い、その後全体での報告会がありました。また、下関市立大学教授 坂本紘二氏をコーディネーターとして『地球市民の環を広げよう!』をキーワードにパネルディスカッションも行われました。参加者からは「NGOというあまりなじみのないところが世界のために働いていることがわかった」「九州の色々な地域でおこなわれている活動や海外での活動を知ることができ、学校の中よりもたくさんのが学べ、今後も環境のことを勉強できそうだった(高校生)」「一般の市民に対する、啓発、連帯の方法はどうすればいいのか」等熱心な質問・意見が交わされ、NGOに限らず、市民1人1人ができる取り組みを一緒に考えるいい機会になったと思います。

(KITA環境協力センター 柴 郁代記)
[環境再生保全機構から受託]

KITA / 北九州メンテナンス技術研究会(KME) 平成16年度セミナー受講実績

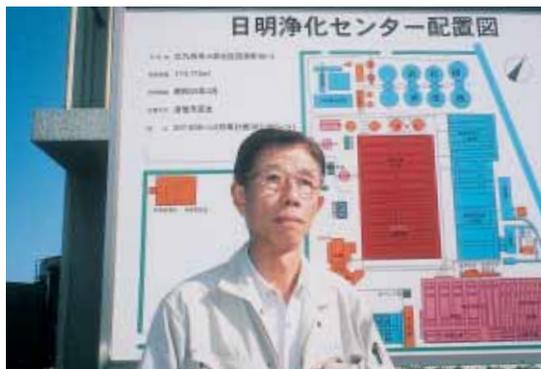
セミナー名	講師	実施月日	会社数(社)	受講者(名)
疲労・強度	(有) 浦島テクノサービス 浦島 親行氏	4月22,23日	8	11
	佐賀大学 教授 西田 新一氏	5月20,21日		
腐食・防食	九州工業大学 助教授 津留 豊氏	6月10,17日	10	15
	(株) 新日化環境エンジニアリング 井上 政春氏	6月23日		
溶接技術	(株) 材料・環境研究所 長野 博夫氏	6月24日	7	12
	九州工業大学 教授 加藤 光昭氏	7月28日		
トライボロジー	九州工業大学 客員教授 安西 敏雄氏	7月29日	8	11
	早稲田大学 教授 松本 将氏	8月25,26日		
制御技術	モータ制御 (株) 安川電機	9月9日 pm	7	10
	インバータ制御 (株) 安川電機	9月13日		
	シケンサ制御 三菱電機(株)	9月28,29日		
油圧制御	内田油圧機器工業(株) 応用技術部 技師 田代 俊朗氏	10月29日	6	13
工場内情報ネットワーク構築技術	早稲田大学 大学院 教授 李 義頡氏	12月3日	4	5
	早稲田大学 大学院 助教授 立野 繁之氏			
	早稲田大学 理工学総合研究センター 客員講師 涌井 徹也氏			
設備診断技術	(有) 日本診断工学研究所 代表研究者 豊田 利夫氏	平成17年1月26,27日	(6)	(10)
合計		()内は予定	(56)	(87)

北九州市建設局東部浄化センター

- 市下水処理施設の講義と見学 -

北九州市小倉北区西港町96 - 3

自国の環境保全に適した 下水処理方式検討の一助になれば



北九州市東部浄化センター 主査 日高修司氏

平成7年からKITA研修員を受け入れ、現在12コースに対応しています。

多くの研修員は、公共施設である下水処理設備の内容を学び、吸収しようとの前向きな方が多く、質問も専門的であり、特に現場を知りたいとの意欲が感じられます。

下水道事業は、浸水の防止、生活環境の改善や公共水域

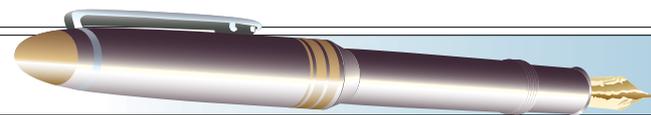
の保全などに役立っています。しかし、下水処理施設は広大な敷地の確保や多量の汚泥の処理などに多額の建設費や維持管理費が必要です。

下水道事業を行うことは途上国にとってはかなりの財政負担となるでしょう。自国の処理状況に適した方式を見出すことが大切だと思います。

そこで、研修員の方々には、「日本の真似をするのではなくて、北九州市で学んだことを応用してもらうこと。施設の維持管理の継承者を育てるための人材育成に力を入れることが大事である。」ことを強調しています。

また、汚水を浄化する微生物の働きを顕微鏡で観察してもらい、1ml(目薬1滴分)中に約30種類・3000~5000個の微生物が生息していることや、微生物がせん毛を動かしながら汚水中の汚れを捕りこむ様子などを紹介し、理解してもらっています。なお、処理実績等のデータはできるだけ最新のものを提供しています。また、他の研修コースでの質問は次の研修コースに活かせるよう配慮しています。

北九州市で学習した広範囲の知識と経験を活用して、自国に見合った環境改善施設の内容を検討し、それを実践してくれればと期待して研修に対応しています。



わが社の研修協力記

西日本精機株

- プラスチック用金型設計・製造現場研修 -

北九州市若松区南二島2 - 25 - 13

生き残り戦略にかける海外企業との 提携の厳しさを学んでほしい

数ある金型メーカーの中から、当社を研修に選んでいただいたことを誇りに思います。

金型受注から、設計・製作・品質の検査に至るまで、一貫して見られるので興味を持ち、熱心に見ただけにいます。研修生の質問も多く、学び取ろうとする意欲を感じます。

当社も韓国との貿易を始めて7年になりますが、2001年をピークに貿易量が減少しています。その原因は韓国の製品品質レベルにあります。韓国の金型製作提携企業に期待するのは「品質レベルアップ」です。韓国の金型メーカーが自国内ユーザーの品質基準に合格しても、日本のユーザーからの注文品を作るには日本の厳しい基準をパスするように努力してもらわないといけません。でなければ、当社が長年努力して作り上げてきた日本ユーザーとの信頼関係を損なう恐れがあるからです。

多くあった韓国取引先も、現在では3社に絞り、各社

の技術力に見合った金型を選択し、発注していますが、これでも尚、品質問題が発生しています。

「日本も韓国も資源に乏しい国ですから、原材料を仕入れ付加価値を付けて出すしか生きる道がない」、中国の著しい発展を目の当たりに見たとき、「品質技術力こそが最大の生き残り条件となり」、「良い品質を、より早く、より安く作ることに徹すること」が是非必要です、と研修生には説明しています。

このような課題に前向きに取り組んでいる韓国金型メーカーと提携したいと考えています。

尚、良い物を作るためには、良い道具が必要です。

韓国も研修生の方々が経営幹部になる頃には、日本に負けないような優秀な工作機械が出来ることを期待しています。



代表取締役 萬財泰樹氏

実践は理論の基に、理論は実践を基に

近畿大学産業理工学部 電気通信工学科
教授 工博 久良 修郭

産業界の現場では、多くのことが、「ノウハウ」の言葉に包まれて、そのやり方が何故うまくゆくかの根拠、あるいは、うまくゆかない場合の状況などは明確にされないままとなっていることが数多く存在しています。このような事態は、技術の発展を阻害する大きな要因であり、また、技術の伝承を困難にする要因でもあるため、現場の技術者が率先して解明してゆかなければならない課題であると思います。

制御系の設計、調整などは、このような「ノウハウ」が存在する典型的な領域と言えます。私は、このような事態を少しでも改善すべく、従来から、モータで制御されている産業用ロボットの腕の動き、あるいは、工作機械の工具を移動させる送り軸の動きに関する種々の現象についての情報、あるいは、その動き方の不具合についてのクレーム等の現場の情報を基に、現象を理論に基づいてその発生原因を解明し、さらに、これらを発展させ理論を基にして現象を眺め直し、現象のつながりを明確にしてゆくことを積み重ねて来ました。

JICAにおける講義では、このようなことにより得た多くの事実を、発生状況の説明を加えるとともに、制御系の問題としてどのように取り組むべきかの観点を説明し、それらに対する理論的な解析方法を示し、解決策・予防策を導出できるようにしています。

「ノウハウ」と言われたり、また、そう思われていることを理論的に明確にすることは、知識欲旺盛な技術者の理論に対する信頼を得る最良の方法だと思います。今後とも、種々の現象の解明に努め、できるだけ多くの事例を伝えてゆきたいと思っています。



研修員に指導中の筆者（左から3人目）

講師の研修への熱意



講義と工場見学のマッチングに努力

KITA 講師 斉藤 和幸

韓国中小企業研修の「クリーナープロダクションとリサイクル新技術」のコースリーダーと講師を引き受けて6年が経過しました。研修生の環境技術習得への熱意と真剣さ、及び日本の習慣（文化）や日本語についての高い関心が印象に残っております。

環境問題は取り扱う技術範囲が極めて広く各業種に亘っております。従って工場見学の対象も公共施設から中小企業まで50箇所近くあり、これらがバラバラの印象にならず技術的に纏めて理解出来るようにするため、講義と見学を組み合わせ技術的に一貫性を持たせるように苦心しました。同種の施設を集めて一週間程度で見学できるように日程を調整し、前週までに「日本のリサイクル技術1～5」と題し次週に見学するプロセスについて要素技術の特徴、フローシート、統計的数値、等をOHPとビデオを多用して分かり易く講義しました。従って研修生は工場見学前に概略のイメージがつかめて理解し易かったと思います。

研修は日本語で行うことになっているので、各講師及び工場見学案内者には「説明はゆっくりと分かり易い日本語で」とお願いしております。しかし個々の研修生からの質問は内容が理解できない場合があるので、講師及び工場見学案内者の説明が終わったら各研修生が自由にハンゲルで意見を出し合って問題点を共有してもらい、日本語の上手な研修生が要点をしばばった質問をすると共に回答をハンゲルに訳して皆に伝え理解を深めました。

帰国した研修生からはよく手紙をもらいますが、“研修の内容と感想を社内報に載せたのでお送りします”とわざわざ日本語訳を付けて送付してくれたのには感激しました。



韓国中小企業研修生と一緒に（筆者：中央）

K I T A 研修コースの紹介

(目的とねらい)



JICAコース『大気汚染源モニタリング管理』

コースリーダー 紅 露 良次

本コースは発展途上国で大気汚染防止に携わる行政官を対象とし、日本の行政施策や対策技術をトランスファーすることを目的として開設されています。今年で15回目を迎え、私は担当して3年目になります。

途上国においては、工業の発展に伴い大気汚染が進み、また大都市における自動車排ガスによる大気汚染は世界共通の環境問題となっています。最近の例では、カイロ、テヘラン、カトマンズ、ダッカ、ジャカルタ、マニラ等大都市から研修員が参加していますが、一様に自動車排ガス問題を解決すべき緊急の課題としてとらえています。

本コースでは研修員のニーズに対応して、発生源や環境大気のモニタリングと採取データの評価、それに基づく行政施策や発生源対策を主要な研修項目とし、講義と現場での演習により研修内容を習得できるようにしています。特に工場での研修が約半分を占め、日本で環境対

策が実施されている現場で学ぶようにしています。また、モニタリングの必要性が理解できるように努めています。

国際協力において、途上国で今何が求められているか、この研修は15年を経過した今もなお、このニーズにタイムリーに応えられると自負しています。資金も技術力も十分でない途上国で大気汚染を解決するのは容易なことではありません。しかし、解決に妙案はなく、日本が行ってきたように効果的な対策を着実に実行してゆくことが必要であることを知ってほしいと思っています。

3か月にわたり北九州市や市の研究機関および民間工場の方々から研修を受けますが、これらの方々の協力があってはじめて研修が成り立っていることを思い、研修を受ける度に頭が下がる思いです。研修員は知識や技術の習得だけではなく、日本の人々に接し、日本の良さを実感して帰国しています。これも国際貢献の重要な成果だと考えています。



JICAコース『非破壊検査技術』

コースリーダー 外 山 弘

金属材料、工業製品、設備、建築物等は、人間の身体と同様、切断せずにいろいろ調べます。設備の建設(誕生)時から、加齢に伴う病気の早期発見、治療と同様に、非破壊検査を実施し、不意の事故防止と寿命延長を図っています。その手法も医療診断と共通する方法を用いています。例えば、胸部、胃腸部の線撮影は、放射線透過検査として、内部の見えないところの検査に広く活用しており、妊婦の腹部、胎児の様子、腎臓、肝臓等をチェックする超音波探傷検査は、機械部品や溶接部の検査に、脳の検査等に使われる線CTは、新素材、セラミックス、コンクリート、立木の年輪などの検出、検査へ、

胃、腸の検査カメラは、光ファイバーとして配管内等狭い場所の検査に使っています。その他磁粉探傷、渦流探傷、ひずみ測定、アコースティックエミッション、赤外線検査等が適用されています。

途上国も工業分野の発展とともに、良い品質の製品を、安定して、計画通りに生産するための工程間検査が要求されてくるとともに、発電所等の圧力容器、各種配管、ボイラ、各種タンク、パイプライン等の工業設備さらに鉄道車両、自動車、船舶、航空機、ビル等各種構造物に関して、その性能に悪い影響を及ぼすキズが無いかの検査は、生産、安全、コスト、環境にとって重要な要素であります。

本コースは、日本でしか体験出来ない実際の現場での適応状況や世界的な機器メーカーの工場見学等を通じて、金属材料における欠陥の発生メカニズム、各種非破壊検査の基礎的理論と実技、材料および設備の使用目的に応じた適切な検査方法の選択、検査結果の評価、分析に必要な知識と技術、日本の新しい技術、設備の現況等習得させることを狙いとしております。平成5年に開講し、現在まで11回、計90名が研修した、比較的新しく、これから重要になってくるコースと言えます。

KITAの国際親善交流

KITAのホストファミリーと研修員

北九州市八幡西区
辻 瑠璃子様

一人っ子の私、でも世界には
兄弟姉妹がいっぱい

KITAの研修員との思い出と言われると、何をあげて良いか迷います。心が洗われるからとコーランを録音したテープをくれたブルネイの研修員、高価な着物を迷わず買ったカタールの研修員。数名の南米研修員を含め10名程で陶芸体験をした上野焼きの窯元では、真剣に取り組む日本人をよそに、彼らはボサノバを合唱しながら、それぞれ違った作品が姿を現した頃には今にも踊り出してしまいそうな勢い。本当にその陽気さには圧倒されっぱなしでした。またJICA九州国際センター開所前に出会った研修員2人も鮮明な記憶に。その1人、母国と米国の大学を卒業し間もなかったタイ人女性タピシリは、私にとって今では世界中で最も大切なひとりです。もう1人は、彼の英文を日本語訳しテープに吹き込んで渡すと、暗記して帰国前のスピーチで皆を驚かすことができたことと大喜び。尾がピクピク動く魚の活きづくりを食べたことを友人に自慢するのだと楽しそうに話していたイラクの研修員です。彼から便りが来なくなって久しく、最近のイラク情勢の報道を目にするたびに心が痛みます。

文化や宗教など社会事情が違って、互いに心を開き尊重し合えば、どんな話題も許しメディアに載らない裏事情も教え合い親密に付き合えました。国は違って信頼できる人のタイプは変わらない...そんな出会いが私の人生観や価値観に大きく影響していると思います。けれど私の母は、どの国の研修員が来られても相変わらず日本語で通し、彼らが「お母さん」を連発しながら辞書を引き引きゲームの相手をしてくれたり...。仕事では簡単に得られない経験はホストファミリーなればこそと、KITAには本当に感謝しています。



母とトルコの弟と

北九州市戸畑区
永井 豊美様
北九州市小倉南区
溝田恵美子様

ラテンでアミーゴ!

私達がホームビジットの受け入れをするようになってもう10年以上になります。1年に2人が平均で、もう20名近くにもなりました。きっかけは、共通の友人が南米アルゼンチンに転勤になり遊びに行き、スペイン語に興味を持ち始めたのが始まり。語学の勉強になればと、受け入れたのですが、ほとんどジェスチャーと北九州弁での会話で全く活かされていないのが現状!でも、なんとかコミュニケーションは取れるものです。語学に自信がないと躊躇されている方は安心して下さい。大丈夫です。

最初は、コロンビアの30代の男性でした。とっても緊張して、どこに連れて行けばいいのやら、お食事は?といろいろ考えましたが、結局いつもの私達を見せるだけ、と無理せず対応しました。夕飯も一緒に買い物に行って、珍しい物の前では歓喜して私達も食文化の違いを知る楽しい時が持てました。時には彼らの手料理で、私達をご馳走になる場合もありました。滞在中は一緒にドライブしたり旅行したり...。帰国後も交流している友もたくさんいます。去年はメキシコの2人のホームビジットの友に逢いに行きました。

お宅に泊めてもらい彼らの家族とも接して、とても楽しい旅でした。太平洋を隔てての縁を感じ至福の時間が持てました。

南米の方々はとっても愛情深く、家族思いです。なんととっても明るい。考え方が前向きでいつもポジティブ。お世話しながらも、私達の方がたくさんの温かいものを貰っています。これからも、ラテンのアミーゴ(友)の輪を広げてパワーを頂きたいと思っています。



メキシコ研修員誕生日に北九州市若松・高塔山でバーベキューパーティ
(右端永井さん、右から3人目溝田さん 平成16年11月)

第4回「環黄海経済・技術交流会議」開催される



環黄海経済・技術交流会議が開催されました。

今回の会議は、2001年3月に福岡市で第1回会議が開催されて以来、第2回の韓国・全州市、第3回の中国・威海市での開催に続くものです。初日の25日は、「全九州半導体技術フォーラム」、「ECOビジネス・マーケッ

ト・ブレイス」、「環黄海ビジネスダイアログ」、「環黄海局長会議」が並行して開催され、翌26日の午前中に全体の「環黄海会議」、午後には宮崎大学で「産学官技術交流会」が開催されました。

全体の「環黄海会議」では、九州経済産業局長、韓国産業資源部局長、中国亜州司副司長、科学技術部担当司長がそれぞれ基調報告、提案を行いました。

共通する認識は、世界経済のグローバル化と地域化の傾向を踏まえつつ、急速に発展しつつあるこの地域の経済の相互の連鎖・補完関係の強化、そのための交流の枠組みづくりを一層進めようということでした。今後の連携強化を期待したいものです。

(KITA環境協力センター 柿本和夫記)

松井前コースリーダーへ JICA 九州から感謝状



JICA九州山口所長から感謝状を受ける松井大三郎氏
JICA九州山口所長から感謝状が授与されました。相良前事務局長につづいて2人目になります。

松井氏は新日本製鉄(株)、(株)高田工業所でご活躍された後、平成元年から当協会の研修事業に参加し、設備管理コースの創設にご尽力され、平成2年3月の同コー

ス開講に伴いコースリーダーをご担当、それ以来、時代の変遷に合わせて、精力的に教科内容の革新にも取り組まれながら、平成16年4月のご退任に至るまでの15年間に、34カ国、129名の研修員を育成され、技術移転、国際親善に大変な貢献をされました。

また、ご多忙の中、他のコースからの依頼も受けて講師を引き受けると共に、毎年変化する研修員の出身国の状況にあわせながら、情熱をもって指導に取り組み、研修員からは絶大な信頼を受けておられました。誠に残念ながら昨年、後進に道を譲ってご退任になりましたが、今後も講師としてご活躍されるとともに、ご趣味(写真)を楽しみながら、いつまでもお元気で私達をご指導下さるよう期待して止みません。

(研修部 松本健三記)

吉川育英会から KITA へ助成金

吉川育英会(会長:吉川蔵夫様)から、平成16年10月に、KITAが研修員向けに作成・配布している英文生活

情報誌「Enjoyable Kitakyushu」の助成に150,000円を賜りました。ご理解とご厚意に感謝申し上げます。

KITA 人事異動

6月22日付	[前]	[新]
コースリーダー	松井大三郎	石川 隆
"	松本 健三	谷口 政隆

10月19日付	[前]	[新]
コースリーダー	見学 克美	矢頭 昭次
"		西野 靖 (新コース)

編集後記

暖かかった正月も明け、激動の2005年を迎えました。この年末にKITA理事長の交代がありました。創立以来25年にわたり産・官・学・民の絶大なご協力を得て全世界に国際技術協力活動の輪が広がった今日のNGO・KITA牽引の原動力だった水野前理事長の功績は永く記

憶に残ることでしょう。

その直前に、23年もお世話になった清水前副理事長が退任されたのも惜しまれます。KITAが実施してきた技術協力内容のほぼ全般にわたって、ご自身の貴重な実務経験と信念に基づいて、精力的に企画立案・指導してこられた姿は多くの方々のおまぶたに残ります。

河野新理事長のもと力強く新しい年を漕ぎ出したKITAを今年も宜しくお願いします。(N)